大山街道

―取残された道の印象―

山本秀男

名所、古跡がなくてもよい。見所がなくてもかまわない。ゲームや合唱をする芝生がなくても差支えない。

「道ある所ハーキユレスあり」

このキャツチフレーズを借用すれば

「道ある所サイクリングコースあり」

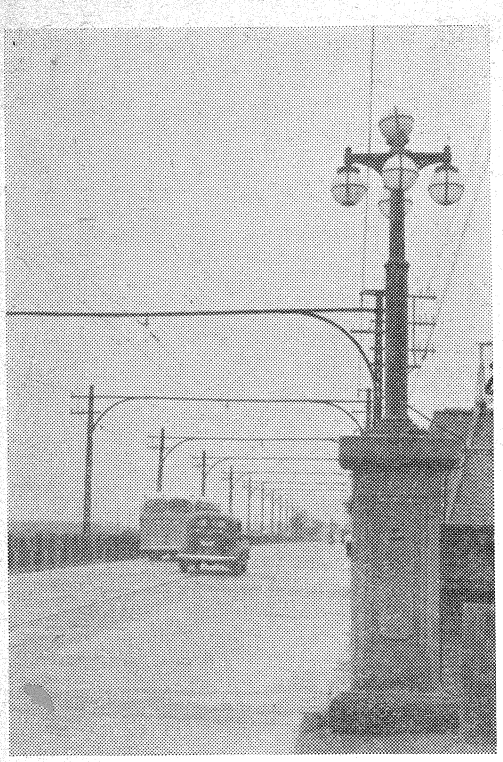
道は何にも云わない。けれども表情がある。モナリザの微笑のような捉え所のない道もあれば、アメリカ人のように派手な表情をしている道もある。或る所では滅法明るく、ある所では泣きべそをかいている。そんな道の表情が私は好だ。だから路傍の僅かな草むらを求めて弁当を喰うような破目にあつても、何の見所もない道を走る。大山街道もそんな道の一つである。

大山街道は裏道である。東京から出る殆どの街道が、いずれも産業上重要な道で、立派に鋪装され、重要な都市、都市を結んで遠くまで延びる。だが大山街道は都筑の丘陵を横切つて相模ケ原の小さな都市へとひそかに延びる。不偶なことには沿道に観光地がない。誰も食指をのばさないから栄えない。取残された街道である。

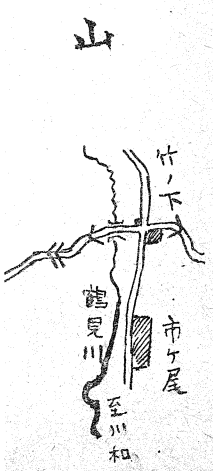
大山街道は溝ノ口から先、サイクリストの影をみる日が少ない。道が悪いという理由よりも見るものがないということに起因するらしい。いまのサイクリストには愛されない道なのかもしれない。

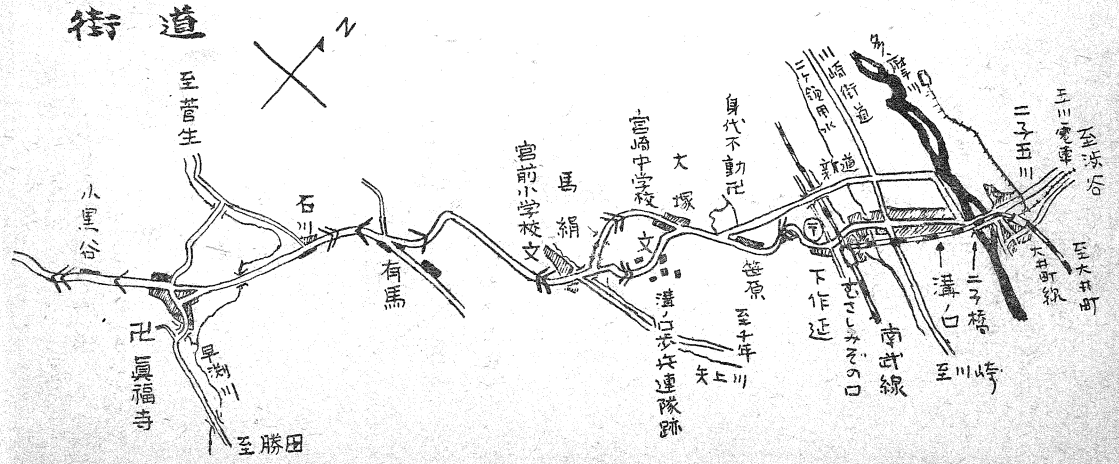
そんな大山街道を私は愛するしかも一番取残された都筑の丘陵を横切る当りがとりわけ好きだ。

大山街道を走れば都筑の丘陵への入口は溝ノ口である。大正十四年七月に俊工した二子橋は当時では立派な橋だつたと思う。橋の入口に立てられた電燈もいまでは古風なものになつてしまつて、最近登戸に出来た電燈と較べれば、三十年という歴史の移り替りを知ることができよう。私の少年の頃、道は砂利道に変る。ここから都筑の丘陵が始るのだ。大きくカーブをしてともかくも登りつめて見給え。麦畠はみんな円狭い道すじ一杯にせり出した家並は、いかにも旧い宿場を思わせるが、いまでも前は藁吹きであつたろう屋根の形がその



二子橋は今ではこの街道の入口だ





燈と較べれば、三十年という歴史の移り替りを知ることができよう。私の少年の頃はこの橋を玉川電車が渡つていた。今は大井町線が渡つている。二本の長いポールを立てて玉川電車が一輛、ゴトゴトと渡つていた方が、この橋には似つかわしい。

溝ノ口は旧い宿場である。昔、江戸の大山講の連中が、阿夫利（大山）詣にかこつけて遊びに出かけたというのが、この大山街道だが、講中の人々の賑々しさを偲ぶとすれば、この溝ノ口であろう。

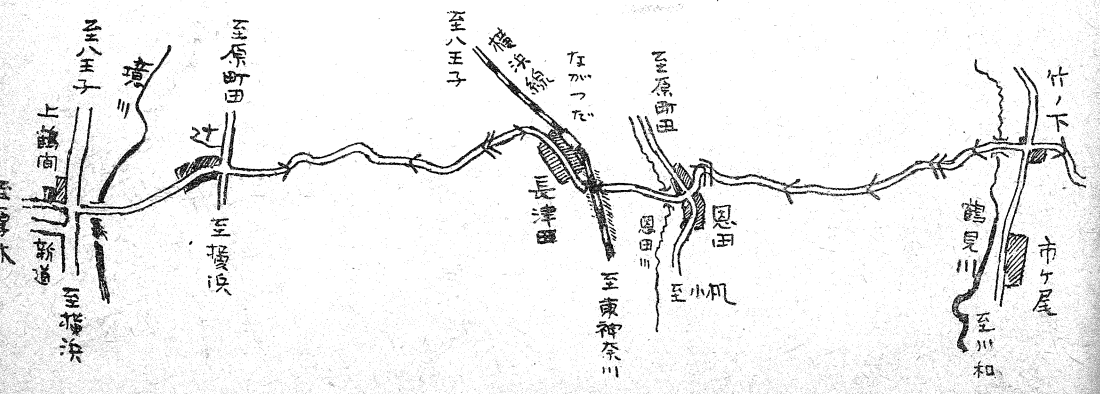
溝ノ口は何となく往時の古い面影がある

狭い道すじ一杯にせり出した家並は、いかにも旧い宿場を思わせるが、いまでも前は藁吹きであつたろう屋根の形がその幾軒かに残り、田舎によくあるような雑貨屋が、俟つぽい色をして、いまでもひそかに家業を営んでいる。狭い道に渋谷行の大型バスが通つたり、トラックが通るので、ゆつくりこの街を見ながら走るというのは危険だが、日曜日の朝早くこの町を通るなら、その風貌に接してペダルの速度をゆるめるに違いない。そして渋谷から二子橋を渡るまで、大山街道という名を忘れていた人でも、この溝ノ口に来て街道の名を知るのではなかろうか。そんな町が溝ノ口なのだ。

溝ノ口は縦に長い町である。けれども川崎街道が横切るとき自動車もサイクリストも吸い込まれるように川崎街道に流れこんでしまう。だから十字路から先の溝ノ口はだんだん淋しくなる。特に二ケ領用水を渡るころは田舎町である。二ケ領用水の大石橋に足を下して右をみて見給え、そこには畠がみえる。左を見給え、布を晒している染物屋の職人の威勢のいい手ぶりをみることができよう。そんな風景にみとれていると溝ノ口の町はすぐ出外れてしまう。

下作延の郵便局を右に認めた頃、道は砂利道に変る。ここから都筑の丘陵が始るのだ。大きくカーブをしてともかくも登りつめて見給え。麦畠はみんな円い線を画いており、その先にはすぐ別の丘陵を見出すだろう。ひとが新宿を出てから、また渋谷を出てから一時間も走つてまだ東京の臭をかいでいるとき、貴方は僅か三〇分そこそこで、畠の中の白い砂利道を走つているのだ。若い恋人同志が歩いている姿を美しいと思う人なら、愛車とともに、この田舎道にいる貴方自身が、若い恋人たちに似て美しくもありまた人に羨まれる存在となつていることに気がつくであろう。

この当りはしばらく丘の上を走るが、右側にある人家の埃つぽいのに淋しさを感ずるのではなかろうか。しばらくいけば、南武線を陸橋で跨いで来る新道と一緒になる。身代り不動と書いた大きな導標をみるのもこの所である。埃にまみれて一見わかりにくいが、導標の一番下を注意してみるといい。北三丁とかいてある。ここでは北は右手になる。その横丁へ入ろう。畠の中の小道をブレーキをかけながら降りていくと小さな不動様



この辺まではサイクリストの姿を見かける　（溝ノ口の十字路）

に出会う。不動の前の畠も田も緑がしたたるようなのに、左手の高い所へいく新道は埃をふきつけて南風が走る。こんな風景は私の子供の頃の世田谷にあつた風景だ。私なんかこんな所でふいと昔を想い出す。馬絹はこの先だが、妻と矢上川のほとりに自転車を投げ出して、同じように緑の田と埃を吹きつける道を眺たことがある。私は子供の頃を想い、妻は何を想つたかは知らぬが、夫婦が別々なことを考えてこの川辺にある　知るとき、そのはかなさをしみじみと想つたことである。大山街道はそんな所でも私の心の中に喰い込んでいく体臭をもつているのだ。

バスの停留所に大塚という所がある。ここで道は二つに分れるが、左へ入る方が本当だ。馬絹で一緒になるから安心してハンドルを左へ切り給え。昔の溝ノ口連隊の前を通るが、心なしか草深くて、深緑の季節には、「つわものどもが夢のあと」…と同じ感概にふけるのは私より古い世代の者の感傷だろうか。宮崎中学校も、そうした兵営の一つだが、グランドの先で一旦はとまろう。丘のつらなりが右手に長く、いまなら熱つぽい光をもつた空と、その丘陵のなすゆるやかな線と、そして眼の下を白く横に走る新道と、どれを見ても季節の臭いが息苦しい程感ずるに違いない。

下作延から僅の距離で馬絹へ下りてしまうので、そしてまた登り坂が目の前にあるので、走りなれた人なら、大山街道はこれからいくつも登つたり降りたりせねばならぬことに気ずくであろう。貴方の直感に誤りはない。

都筑の丘陵は、相模湾に注ぐ境川まで続く。そしてこの丘陵は、うつかりすると見落すような小さな川によつて、いくつもの谷地が刻まれている。それは皺のようでもあり、皺の底に川が流れ、そして部落がある。馬絹から先へいくと、とくにそんな感じがする。それが又走るものにとつては楽しい。というのは、ところどころで大山街道は表情を変えていくからだ。悪い路面に驚かず、目のまえの登り坂に嫌気をさずに、もつと先まで走り給え。

例えば有馬へ降りれば気がつくだろう。バスの停留所に有馬と書いてあるので、有馬だと思うが、左側に山が押し寄せ、行手には小さな山があり、右手が畠である。そして正面の小さな山には、農家がへばりついている。それは山里の風景だ。一寸自分のいる所に錯覚を覚えるのもこんな所である。だが一寸登ると、川崎市と横浜市の境界標が目に入る。一寸がつかりするが、境界線から真直に下る坂は、サイクリストが嫌いな地形ではない。下りれば石川であり、すぐ荏田である。この当りは昔の都筑郡であるが、今でも都筑の名が残つているので驚いた。というのは、この荏田には床屋もあり、自転車屋もあり、雑貨屋も二軒ある。この雑貨屋に青い旗が立つていた。都筑の商店連合の旗なのだ。おそらく都筑の丘陵のどこかに散らばつている店同志が図つて会を作つたのであろうが、その会の名に都筑という二字をつけているのも、今は消えた都筑という名を惜しむ

安心です
パンクのマスコット
地球パッチ
NO3 実物ピース大

マルニ工業株式会社
大阪市生野区生野田島町2ノ1 TEL(73)4019

人がいることを知つて嬉しくなつた。都筑という名は、私の古い地図に出ている。昭和九年版の五万分の一の地図は、私の歩いたり走つたりした道すじが、赤鉛筆や、青鉛筆や、或る時は黒い鉛筆で書いてあり、境界線を探して引いた線などがゴチャゴチャになつているが、その中に「都筑」という郡名を表記する二字がはつきり出ている。この二字に執着を持つのは旅人の感傷かと思つたが、あながちそうでもなさそうだ。

荏田はこの丘陵の中の一つのポイントだと私は勝手にきめている。大山街道を走るたびに荏田で休む習慣があるためかも知れない。ヤビツ峠へいくのに若い人を十一人連れてここを通つたときにも休んだ。バスの終点なので、待合室がある。待合室にたむろして若いサイクリストがムシャムシャと勝手にほほばつている姿は、バスを待つお客を驚かしたことであつた。或る時は二人してポツンと十字路に立つて休み、或る晩は床屋から聞えてくるラジオで天気予報を聞こうと思つて、寒々とした店先で立つて休んだ。

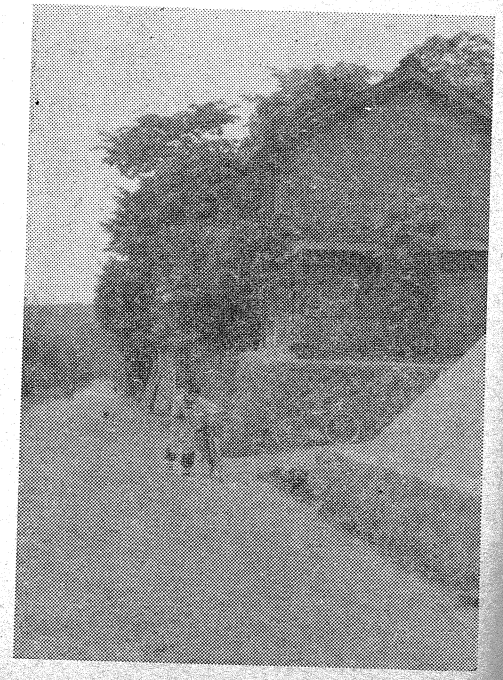
そして或る時は雑貨屋の店先で婆さんと話をした。

今ではどこもそうであるように、荏田でもアイスクリームを売る白い冷蔵庫が何でも屋の店先にある。十円と二十円のがあるが、二十円のを買つて喰べた。カラはどこへ置けばいいかと婆さんに聞いたら、そこへ捨てればいいという、そんな所は至極大雑把である。その次にいつた時ジュースをくれといつたら、三十五円のジュースを出して、「高い方をもつてきました」といつていた。みたらキリンのジュースだつた。私の風体のどこに高級品を買うという標示がしてあるかわからぬが、二十円のアイスクリームを買つた実績によるらしいと考え、思わず吹き出したくなつた。

荏田からの登りは緩いが長い。そして人家がなくなる。ここの道すじは夜更など気味が悪い。今井氏とナイトランで飯山温泉へいくのに夜更にここを通つたことがあるが、沈むに早い新月が心細く、そして鋭い姿を右手の山かげにかけていた。何となく不気味でならない。灯影というものがない。雨の近づくような生温かい風が通りすぎる。男二人でも心細いのはここと、竹の下から恩田へ抜ける道だ。なまじ新月でも月があつたから気味が悪かつたらしく、その次に真暗闇のときレディサイクリストとここを帰りぎわに通りすぎたときは、それ程でもなかつた。想うに、頼られているという張りの故もあるらしい。そういえば男二人ではお互に相手を頼りもしないだろうし、頼られるという意識は更にあるべく筈がない。これが昼だと、一寸カメラを向けたくなる道だから面白い。数人が走つてくる。それをカーブで待ち受けてファインダーをのぞく。絵になるような気がするのだ。そんな気持で同行の数人を写したこともある。

ある時、それは冬だつたと思うが、珍しくサイクリストを見た。クラブの石井氏だつた。一緒にこの道を走つたが、それはこの道で予期せぬ人に会つた唯一の想い出である。彼はレチナを首から下げていた。カラーをものにするつもりだそうである。だが大山街道はカラーの対象になる風景は秋になるとくに少ない。紅葉は鶴間までの間に一本しかない。そ

この辺からは田園風景が濃くなつてくる　（二ケ領用水）



この街道らしい風景がある（石川附近）

JCA事務局長兼指導部長
曾雌定理編

サイクリスト手帖

記録からプラニング、年間の走行メモをはじめ、写真記録、コースガイド等、サイクリングの実施に必要な記事ＥＴＣ、も集録した192頁オフセット印刷の高級ビニール装幀サイクリング関係の専門手帖として文字どおり日本ではじめてのものであります。

御註文の方法

◇御送金は振替貯金(東京55566)を御利用になるのが安全で正確でございます。
◇サイクル時報社でも発売しております。
◇五部迄の御註文には必ず送料御加算の上、御送金くださいますようお願い致します。六部以上の場合は当方負担とさせていただきます。

¥ 150 (〒16)

峠　書　店
東京都世田谷区世田谷1ノ154
振替　東京 55566 番

長津田までの間この街道唯一の商店のある荏田

れも電線が邪魔する。えらい苦労をして湯浅君がわれわれを配して一枚ものにしたのは昨年の十一月だつた。

何でもない道すじでも想い出は残るものである。

竹の下も四辻である。だだつ広い十字路に煙草屋の店先にベンチが置いてある。そして煙草屋の店先にベンチが置いてある。バスを待つ人に供してあるのだ。これを夜中、充分道を承知している筈の二人が何としたことか、川和で曲りそこなつて佐江戸へ出ずに一時間前に通つた竹の下へ再び出てしまつたことがある。まあ二人でよかつたと思つているがベンチに腰を下して夜の夜中にパンを噛り、どこかに井戸がないかと、うろうろしていたという想い出も、この竹ノ下という間の抜けた四辻にはうつてつけの想い出である。随分がつちりしているようでもヘマをやつて我ながら呆れることもあるものだ。

鶴見川が四ツ辻の先に、ほつそりと、それも草におおわれて流れている。

竹ノ下からもう一度上ろう。地図にみると六七米から七六米へと、思田へ出るぎりぎりまで登つていく。鶴見川を渡つて登りはじめる頃左手の風景は小さいながらよいと思う。市ケ尾の方まで鶴見川のほとりの狭い田が下の方に置き去りにされていく。いかにも登つていく感じがするのだ。そしてこの道は、おやと思う所で左右に谷があつたりする。尾根を走るに似ているといえば大げさかも知れないが、路傍の草むらを境に、ドンと落ちている谷をみると、私はこれも大山街道の一つの表情だと思う。そうかと思うと右手に崖があつたりする。

坂を大きくカーブして下ると恩田の十字路である。この道は四方全部一時停止の交通指導標が立つている。それはここが坂の中途だからであろう。それだけに前方の眺めは、今までのダウンヒルと異つて滅法明るい。横浜線の高い土堤は濃い緑にもえていて、そこまで白い道が真直にのびている。ここは、季節は梅雨明けどきがいい。雲もようやく高く、そして熱つぽく輝いて山狭の田をもえたたせる。蛙の声が田に湿つてケロケロと大きく響く。

春もうらうらとした薄曇りの日はとりわけいい。そんなときは恩田川をはさんで延びる田のほとりをいきたい。小机の方へ下つてもいいし、鶴川の方へいつてもいい。菜の花が咲き、ネギ坊生が白くほのぼのと愛嬌をふりまき、えんどうの花があいらしい。こんな風景の中を老若男女、子供を交えて走つたことがある。

道端で見ていた人が一家総出だと、羨しげに見送つてくれた。

村山あたりだと、これは四〇〇円の自転車だと子供にきめつけられてガツカリしたという話を聞いたが、この辺ではそんな憂目にあうことがない。

晴れた日に、それも晩秋がいい。厚木に向つてこの道を走つて来たものは、きつと印象深い眺めに接するであろう。丹沢と富士がいろいろと山容を変えるからである。図田まで走つてくる間に、すでに何回か丹沢を見、富士をみてくる筈だが、道はところどころで方角を変え、そして何辺も丘陵の上に出る。その度に見る山の姿が変つていることに嬉しくなるだろう。若い人たちと来たときも、この眺めを楽しめた。長津田を過ぎて、辻に出る手前では、丹沢がうんと大きくなつて、富士山がその上に遠慮しがちに、ちよこんと頭をのぞかせていた。

「おい見ろよ、富士があんなに――」

そんな時ポケツトへ自然に手が入り、煙草を掴み出すだろう。一服喫つた時の気分は、青梅街道や甲州街道のものではない。

菅沼達太郎氏は五月号の「古い話」で曰く

「英国やフランスでは自動車に追突される事故が多いそうですなあ……」

まだこういう言葉も通用しそうだ。なにしろ自動車の量は極めて少いからだ。

だが、この静けさも鶴間で終る。あとは行政道路の中に飲み込まれてしまつたからだ。

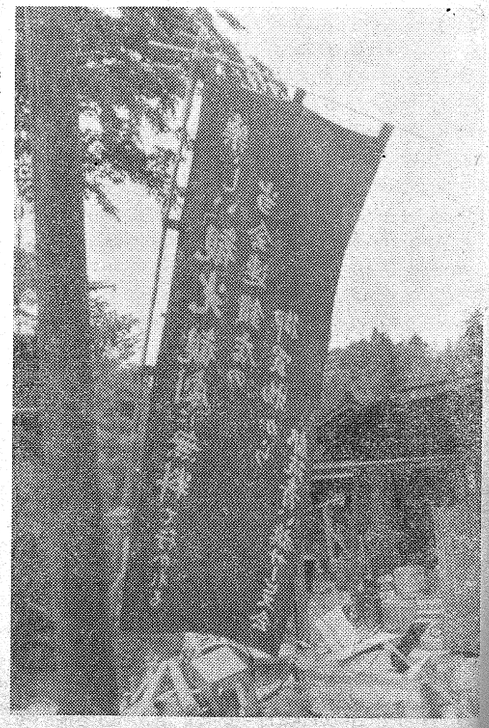
都筑の丘陵を過ぎてしまうと格別な魅力がなくなつてしまうのは、どうしようもない。もう一度都筑丘陵に後戻りさせてもらいたい。そこにはまだふれてない表情があるからだ。

この道中、上鶴間までの間には鋪装路は二カ所、それもほんの僅の間にしかない。一つは横浜線の駅のある長津田の町中である。ここは商店も並んでいるし、ともかく道中唯一の町らしい町であるから当然である。もう一つは、こんな所にと思う所に二、三百米ある。それは馬絹の坂の上の、宮前（みやさき）小学校の前である。同じような鋪装の仕方は、隣の中原街道の大棚にも、また荏田の横の山内にもみられるが、察するに、せめて学校にだけは埃を浴びせたくないという人の世の親心のあらわれではないかと思う。それほどに埃に悩む日が多いのだ。もし、大山街道の沿道の桁根でも木でもいい。緑したたる桁根や木をみられればそれは雨上りだけである。お互に貧しい国に生れたとはいえ、私達の住む所との違いの大きさに胸を痛めずにはいられない。大山街道はこんな所では、きわめて貧しい表情をする。やはり取残された街道である。

取残されたという言葉を大山街道に当てはめれば、荏田の真福寺を想い出す。この近辺に三つしかない重要文化財指定の仏像のある寺である。

歴史散歩ではないが、一寸真福寺に立寄ろう。荏田の十字路から鋪装路に入る。早淵川の橋を渡るとすぐ小さな自転車屋がある。その横を左に入れば、木立の中に真福寺がある。ひつそりとした寺だ。入口に横浜市教育委員会が昭和二十七年に立てた案内板をみると大要次の通りに書いてある。

養良山真福寺は新義真言宗豊山流に属しているが、残念乍ら寺伝を失い開基、開山とも不明である。僅かに求めるとすれば新篇武蔵風土記稿に「墓所に法印定誉という僧の碑ありて天和二年寂せしよしを刻せり、これ開山なるもしるべからず、本尊薬師、座像にして長一尺四寸云々」とあるが、現在の本尊は六臂の千手観音立像で薬師ではない。別にも釈迦堂にあつたと伝えられる釈迦の立像を安置している。この像は所謂嵯峨清涼寺式又は三国伝来の釈迦と称するもので全国に数十軀、神奈川県下に四軀、横浜市内では金沢の称石寺にあるという。なお釈迦如来の立像が重要文化財に指定されたのは昭和二十五年で、それより古く昭和八年に国宝に指定されていた。作は藤原時代末期らしい。

あまりにも印象的に私は大山街道を書いたが、走ることの好きな人にとつてはこういう印象的な道は愛されるべきだと思うので、あえて何のとりとめもない道を書いたわけである。古事に興味のある人には埋もれたいろいろな面白いことがこの道すじにあるようだが、それは私の出来ることではないので、誰か興味のある方にゆずりたい。

筑都の名を残している風景